

αMプロジェクト2023-2024

開発の再開発

Redevelopment of Development

vol. 3 Sabbatical Company | Sabbatical Companyの宣言エクササイズ vol. 3 Sabbatical Company: Manifestos Exercise for Sabbatical Company

ゲストキュレーター: 石川卓磨(美術家・美術批評)

Guest Curator: Takuma Ishikawa (Artist, Art Critic)

2023年10月28日(土)～12月23日(土)

12:30～19:00 日月祝休 入場無料

協力: 平和紙業株式会社、株式会社竹尾

アーティストトーク 10月28日(土) 18:30～

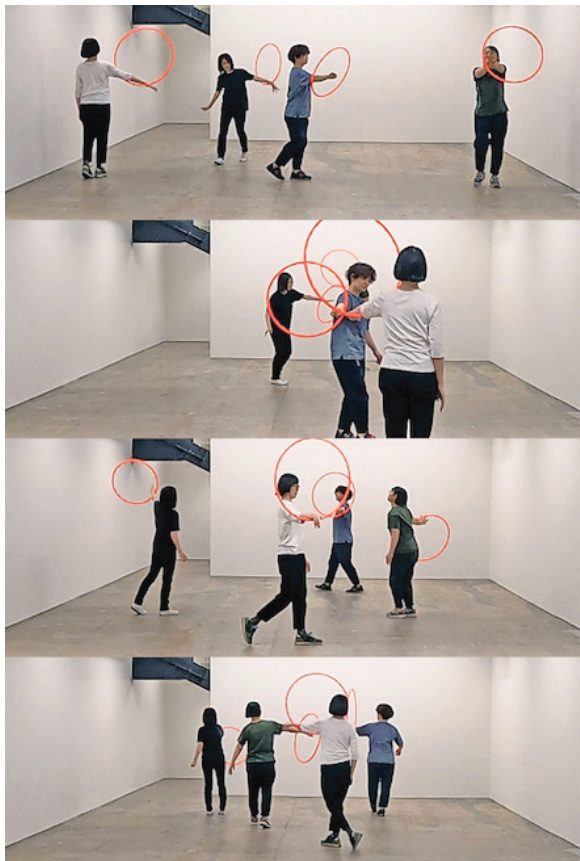
Sabbatical Company×石川卓磨

会場: gallery αM

〒162-0843 東京都新宿区市谷田町1-4 武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス 2階

tel:03-5829-9109 fax:03-5829-9166 <https://gallery-alpham.com>

※2023年度より馬喰町から移転いたしました。電話番号、FAX、Eメールアドレスに変更はございません。



「休暇」という概念の開発

杉浦藍、益永梢子、箕輪亜希子、渡辺泰子によるアーティスト・コレクティブ Sabbatical Company（以下、サバカン）の活動は、2015年より開始されているがフルタイムではなく、個々の作家活動と並行的に行われている。メンバーは個人でキャリアを積み知られているアーティストたちだ。その並行的な活動の意味は、グループ名自体に示されている。Sabbatical は「安息日を語源とし、専門性を磨く創造的な長期休暇を意味」し、「共にパンを食べる仲間を語源とする」Company が結ばれている（サバカンのウェブサイトより）。わかりやすく言いなおすと、サバカンは、個々の作家活動の「休暇」をとって、4人で研究や実験を共有するプロジェクトだ。

作家活動の「休暇」をとって、別の活動を行うことにはどのような意味があるのだろうか。なぜ個人として活動しているのに、さらにグループで活動する意味があるのだろうか。そのような質問をしたくなる。しかし、おそらくサバカンはそのような質問に対して「なぜすぐに意味を説明できなければいけないのでしょうか？」と質問で返してくるはずだ。

アーティストに「休みの日は何をしている？」と質問すると「制作している」と返ってくることは多い。では「作家活動の休暇をとるとしたら何をする？」と聞かれたら何と返すだろう。アーティストであれば、誰もがそう問われることを想像するはずだ。アーティストにとっての「休暇」とはなんだろう。これは意外に難しい問いである。この問いに対する言語化が、サバカンの存在理由に関わってくる。

現代美術は説明や理解が難しいからこそ、自らの活動の意味や理由を説明する言葉が求められるため、アーティストはいつも言語化や責任が突き付けられる。それがプロフェッショナルなアーティストに求められる一つの条件とするならば、サバカンのメンバーは個々にその厳しさに向き合いながら、活動や制作を行っている。しかしこの言語化には、限界や不自由さが付きまとう。

だから、サバカンは「休暇」をとって「休暇」という概念の開発を始める。それは言語化からの逃走を意味しない。サバカンは、自らの活動の言語化を可能な限りゆっくりと行うことを決意しているのだ。言語化が目的なのではない。「言葉になる手前」の経験の共有とそれを思考すること自体が重要と考えている。休暇という概念の開発は、4人の芸術と人生のために考えられた言葉と身体の実験によって具体化される。音を出して、身体を動かして、言葉を否定して、新たに言葉を書き込むことが重要なプロセスになる。今回作られた「マニフェスト（宣言文）」は、彫刻的なニュアンスを含んだ「たたき台」であり、身体は言葉をたたくように動き出し、新たな言葉、概念を生成している。

石川卓磨

Sabbatical Companyの宣言エクササイズ

「私たちはパズルが完成する前に額を用意する必要はなく、そもそも解くべきパズルを事前に用意することもしなくていい。人と人とが集まろうとする動機は理由をつけるまでもなく、意味があるはずだから、その意味が生まれる前の時間を、最も生産性のある場として捉え直すような活動はできないだろうか。それはきっと、手を取り合って生きていくのとは少し違う、持続された各自の人生に別の時間を確保するようなもの。ひとりでは見られない景色をみよう、Sabbatical Company はスタートをきりました。」*

2015 年の結成当初、「言葉になる手前の時間を共に過ごそう」というスローガンのもと、今はまだ自分たちのやっていることに名前をつけるのはよそう、そして 10 年経ったら一度この活動を振り返り、そこから生まれた言葉をまとめてみよう、と話していました。

活動はあと 2 年で 10 年になります。

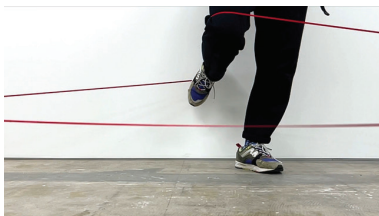
今は、私たちが見てきた景色を言語化する準備として、身体と文字をほぐすエクササイズ中です。

*「まえがきでもあり、サバティカルな意味では本文でもある、あとがき」より抜粋。「夕方帰宅してみると」(Milkyeast、2016) 終了後に公開。 <https://www.sabbaticalcompany.com/project-1-afterword>

Sabbatical Company

●Sabbatical Company (さばていかるかんぱにー)

杉浦藍、益永梢子、箕輪亜希子、渡辺泰子の同世代 4 人により 2015 年に結成されたアーティスト・コレクティブ。安息日を語源とし、専門性を磨く創造的な長期休暇を意味する Sabbatical と、共にパンを食べる仲間を語源とする Company を組み合わせコンセプトとし、プロジェクトを主体に活動を行う。主な個展に「OR We are still chatting.」TALION GALLERY (東京、2022)、「OR Have a good day.」Maebashi Works (群馬、2016) など。主なグループ展に「ところざわ アートのミライ」西武鉄道所沢駅等 (埼玉、2023)、「3331 Art Fair 2017 -Various Collectors Prizes-」アーツ千代田 3331 (東京、2017) など。



《エクササイズ:ゴム飛び》
2023年 | 映像



《エクササイズ:バランスボール(空気を抜く)》
2023年 | 映像



《エクササイズ:紙風船》
2023年 | 映像

開発の再開

現代は、気候変動、感染症、戦争、自然災害、テクノロジーなどによって、永続すると信じられていた日常が大きく変動し、将来の予測が困難な激動の時代となりました。この時代の現象には、ネガティブなものばかりではなく、不平等、差別、暴力を強いてきた社会や構造に抗議し変化を与えていく社会運動も含まれています。ソーシャリー・エンゲイジド・アートやアクティビスト・アートなどは、社会に直接的に関わり、そのような時代に対応したアートだといえます。しかしそのようなアートと社会の関わり方を見ると、そこにはさまざまな障害、温度差、矛盾、認識不足が存在しています。そのため私は、社会に直接関与しようとするアートのアプローチに限定せず、造形的表現や美術史においても、この時代を乗り越えるための新しい認識や方法へのアップデートが重要だと考えています。

「開発の再開」というタイトルは、以上のような前提に向けられています。そして、開発であれ、再開開発であれ、そこではなにかしらの「新しさ」が関わることを意味しています。

しかし、哲学者・美術批評家であるボリス・グロイスが指摘するように、この数十年間アートで「新しいことをするのは不可能である」という言説や認識が広く影響力をもってきました。「アートの終焉」(アーサー・C・ダントー)の言説は、この影響の歴史的な起点になっています。ここでの「終焉」とは、アートという営為自体の終焉を示しているのではなく、「アートの終焉」以後のアートが存続していくことを前提にしています。つまりアートは終わったままこれからもずっと続いていく。そのため「新しいことをするのは不可能である」という悲観的表明は、美術史の重荷や緊張関係から解放されて、アーティストが個々人の表現活動を自由に展開できればよいという楽天的な気分を含んでいます。

では、この激動の時代において、アートは、「新しさの終わり」や「アートの終焉」に留まり続けていいのでしょうか。冷戦体制崩壊後の時代を象徴する「歴史の終わり」(フランシス・フクヤマ)という歴史認識に、批判的な検討の必要性があるとされているように、「新しさの終わり」という認識から批判的に脱却する必要があるのではないのでしょうか。

ただし、これまでのトレンドと差異をつくり出すような新卒のトレンドを提示したいわけではありません。なぜならそれは結局トレンドの構造を何も変えることがないからです。むしろ私たちは、これまであまりにも一方向的(過去→現在)な「新しさ」を信じ、限定的な価値基準で「新しさ」を認めてきたのではないのでしょうか(アートの新しさとは、作品の様式や美術館の内部だけにあるものなのか)。

「開発の再開」とは、「新しさ」をつくり出す開発という概念自体を、批判的に再開する試みです。また、開発は結果ではなく過程であり、実験、研究、調査という行為が不可欠です。再開開発は、開発がもつ拡大・拡張の一方向的なベクトルとは異なる時間的・空間的な展開を意味します。本展覧会シリーズの8組のアーティストやコレクティブには、テーマや表現形式に共通性がないとしても、それぞれが歴史や方法に関わる研究・実験的活動やコンセプトをもっています。それを駆動しているのは必ずしも作品や展覧会に成果が集約されないモチベーションかもしれません。展覧会や作品は、結果としてわかりやすく「新しさ」を示さないかもしれません。しかし、この投げかけによって「開発の再開」とは何かを考える契機が鑑賞者にも生まれるのではないかと考えています。

石川卓磨 (美術家・美術批評)

●石川卓磨 (いしかわ・たくま)

1979年千葉県生まれ。美術家・美術批評家。芸術・文化の批評、教育、製作などを行う研究組織「蜘蛛と箆」を主宰。近年の主な論考に「パーティーの後で」『中崎透 フィクション・トラベラー』図録(水戸芸術館現代美術センター、2022)、「寄生し、介入する 旅するリサーチ・ラボラトリー」『丸亀での現在』図録(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2022)、「アフリカ系アメリカ人として生きる「怯え」と文化的混血性。ラシード・ジョンソン「Plateaus」レビュー」(Tokyo Art Beat、2022)、「特権的な眠り——福永大介「はたらきびと」展」『月刊アートコレクターズ2021年1月号』(生活の友社、2021)など。

■取材、掲載用写真の貸出など、ご質問がございましたら下記までお問い合わせ下さい。■

gallery αM ギャラリーアルファエム

e-mail: alphas@musabi.ac.jp / tel:03-5829-9109 / fax:03-5829-9166

武蔵野美術大学 大学企画グループ 連携共創チーム(ギャラリー不在時)

tel:042-342-7945 / fax:042-342-6087